

## (四) 捨身修行

### 山の行場

近鉄線の桜井駅近く朝倉駅で下車して忍坂を通り、下り尾村の入口より山坂道を、七百メートル程登り詰めた所に、下り尾の清滝の行場があります。汗を拭き乍らやつと目的の籠堂に着きました。色の白い上品な奥さんが愛想よく迎えて下さり、ホッとしたのです。床板の上には古びた上敷きがしいてあり、電気工事も出来ていません。屋根は杉皮葺で、其の上に直径三十センチ位の石が二十個位乗せてあるバラック小屋でした。この行場がこの先生の仮の住居でした。

「汗をかいながら、先ず滝に打たれて一休みをしよう。」と滝場に案内されました。高さ五メートル位の岩壁の上より落ちる滝水は、下の方で一メートル位に広がっています。

其の黒ずんだ岩壁に不動明王の立像が彫刻されて、滝場に薬力龍王、薬力姫龍王と自然石に名前のみ深く掘りこまれた高さ一メートル位のものが祀られています。滝の手前側に巾二メートル、奥行一メートル位の簡単な拝殿がありました。この拝殿の所で行衣と着かえて、滝に入る作法の手ほどきを受けて、私は滝の外で、不動明王の慈救呪をとなえて拝礼し神仏に挨拶しました。先生は大きな気合いを入れて中に入り、禊のお祓をあげた後、法華經を読むと言う神仏両道の修行が十分程続き、次に私が入れてもらいました。私は真言宗の水行の作法通り、沐浴身体、当願衆生、内外清浄、心身無垢と念じて、次に水天真言オンバラダヤソワカ七反<sup>へん</sup>、次に不動慈救呪七反<sup>へん</sup>、次に般若心経一巻で終り外に出て、持参の白衣に着がえたのです。

こここの先生は両部神道で苦修練行し、難病を救済する力を得たとの信念を持つておられました。参籠所に帰ると、奥さんの歓迎の手造りの山菜料理の御膳が出来ていきました。

現在と違い五十年も昔の事ですから結核に対する良薬のない時代のことです。先生は『医師の治療も、神仏の信仰でも治りにくい病氣であるが、今迄に何人も全快させた経験

があるから、安心して、わしの指示通り実行しなさい。体を安静にしても、心になやみや、苦しみがあつては病気はなおらぬ。心を安らかに持つて、あせらず、喜怒哀楽によつて心を乱さぬよう、精神の修行をすること。禊ぎ祓は、身心を清めるに一番よい修行であるから、毎日朝五時と、十時、午後一時と午後五時の四回の滝行をして、朝晩は滝行の後に朝暮の勤行をすること、修行時間外は、天氣の限り山に行つて枝柴を拾い集めて燃料にせよ』と言つたのです。

## 山 の 修 行

今迄医師の指導により安静療法をしていた私にとって、全く反対の生活に入りました。

発熱のために頭痛がしても『滝に入り熱をさませ、病気に負けるな、病気も悪業も、滝行によつて洗い流すのだ』と強い言葉で励まし、自ら率先して滝に入る先生でした。負けん

気の強い私は、何くそ根性を出して、岩壁に刻んである、不動尊に一生懸命に祈願して後、参籠所に祀られている天照皇大神と三輪明神（大国主の神）と、私の守護神として常に奉持していた伊勢桑名市の土仏山護摩堂の本尊秋葉権現の分身の仏像に一心不乱に病氣平癒を祈つたのであります。

## 胃 腸 障 害

今迄田舎で自家米を食べて養生していた私は、配給食の厳しさを思い知らされました。

現在の食生活から見れば、当時の配給食は、家畜の飼料と同じくらいの粗末なもので、小麦はそのまま押しつぶしたもの、大麦は外皮が僅か除去した丸麦、甘藷は生を薄切にした乾物、米は玄米に等しい、三分づき程度のもので、この不馴れた食生活のためか、滝行で冷えたためか、私は胃腸の調子が悪くなり、尾籠な話ですが十一月頃より毎日数回も下

痢するようになり、十二月に入ると一日十回ぐらいもする状態で肋骨は洗濯板のように、足は骨に皮膚をかぶせたように痩せ衰え、咳や啖は一段と激しくなって来ました。「腸結核になつたのではなかろうか？死にたくないのに、このままでは死ぬ、ああ死にたくない、私は信仰により自分も救われ、又人をも救う道を求めて、親の反対迄押し通してきたのに、真に残念だ」と死の恐怖はつのるばかりがありました。

昭和二十一年の一月は、とても厳しい寒波がおしよせて、北向の滝場は長さ二メートル程もある氷柱が出来て、水落の部分のみが開いた氷の家のような、滝場が私を待っています。十二月より、滝行は一日二回になりましたが、滝行の腰巻は竹竿に掛けている間にピソと凍ってしまう厳冬であります。その氷りついた腰巻を、手でもみくだき、痩せ細った体に巻きつけて、雪の降りしきる滝場に、歯をくいしばって進むのであります。まさに地獄絵のような毎日で、私の心は暗く落ちこんでいきます。寒さをしのぐために籠所の「イロリ」にはたくさんの枝柴が必要で、燃料集めも衰弱しきつた私には大変な重労働でありました。

## 師の帰宅命令

私の暗い気持を見ぬいた先生は「お前は毎日何をなやんでいるのか」と尋問されたのです。

「ハイ私は山に行き修行すれば必ず病氣がよくなると先生に薦められて山に来ましたが、体は衰弱して、良くなつてきたようには思いません」

「それで苦しみ、なやんでいるのか」「ハイ」師は、私の顔を厳しく見つめ「今のお前之心では病氣は治らぬ、死なぬ先に早く生家に帰れ。お前は自分で自分の病氣を造っている。はじめに教えた事がまだわからぬのか」と叱りとばされたのです。

## 反省

私は不動尊の御前に座り一心不乱に祈念して、今後どうすればよいか、教えて下さいと、祈願しましたが、何のお知らせもありません。自分で自分の進路を考えよと言う事でありますか。二年余ヶ月も医師の指導のもとで養生させてもらつたがよくならぬ自分だ。今家に帰つても、前と同じ事であろう。家を出る時、もし裏目に出で死ぬような事があるても、私の運命と諦めて下さいと言ひきつて来た自分だ。「初心忘れるべからず」である。「これ位信心しているのに、神仏は助けて下さらぬのか」と思う心は神仏に不足を言つている事になる、感謝の心がないのだ。まだ信心がならないのだ。信心をもつと深めようと、心にきめ、先生に自分の心得違いをおわびして「死んでも不足に思いません。ご迷惑でしょうがここで引き続き修行させて下さい。死んだ時は実家に連絡して下さい。軍隊より復員した長兄が迎えに来てくれると思います」と決心の胸中を打ちあけてお願いしました。先

生は「その覚悟があれば、ここにいて修行しなさい」と許されました。

## 捨身修行

先生は雪の日も氷雨の時も朝晩の滝行は常の如く悠々として行じられます。氷の滝場から出られた姿はまるで風呂から出られた如く、水氣を拭く体より湯気が上がっています。寒さにふるえている私を見て、寒さに負けるな、自我を殺して水と一体になれ、水は天地の神の恵みの水だ。水は、水の神でもあると教えられました。しかし未熟な私は、水の冷たさはわかつても、有難さは理解出来ませんでした。

## 仮死状態

一月二十日の夕勤行の後、私は気を失って倒れたらしく、自分では苦しみのない夢の世界に遊んでいました。

「聖規！ 聖規！ 返事をせよ」私の名を呼ぶ声がかすかに聞こえ、体をゆすり乍ら「目をあけろ」と大声が私の耳に入りました。先生の顔がポーッと見えました。「気がついたか、しっかりせよ、眠るな、目を開けて、神仏を拝め、おれは、もう一度滝に打たれて、お前の延命を祈つてくるから」と言いのこし、籠所より五十メートル程離れた滝場へ急ぎ行つて下さいました。

暗やみの凍りついた滝の中で、先生の大きな気合いの声や、お経の声が静かな山あいに響きます。横たわっていた私は座りかえて、滝の方に向い感謝の祈りをしました。先生の真心が心の奥底まで伝わって、感激の涙が流れました。

滝場より帰つてこられた先生に「ご心配をかけてすみませんでした。有難うございました」と心底よりお礼の挨拶をしたのでした。

## おまかせの信心

私の心得違は何んであろうか、神仏の御心に、叶わぬものは何かと、夜の明ける迄、自分で自分の心を視つめました。心中の仏は「お前は何回教えられても、わからぬ愚か者だ、毎日毎日、自分の病気を心配している、心配することは、神仏を信じる心がうすいからだ。神仏に守られるながら、心配することは、慈悲の光明をさえぎる黒幕のようなものだ。おかげせよ、そして守られ、生かされている事を、心より感謝せよ」私はここに至つて、ようやくにして自分の心得違いを覚らせて頂きました。

生まれた者は一人残らず死んでゆく、これが、諸行無常の教えである。死ぬ時が来たら

喜んで死ねばよいのだ。元気な友人が戦争のために多く犠牲になつて死んだ。又恐ろしい爆弾のために一度に何万人もの人人が死亡したのだ。生死は自分の計らいの外にある。自分は今、死の世界に入りかけたが蘇よみがえらせて頂いた。私がこの世に必要であれば、この世に残して下さるであろうし、必要がなくなれば仏の世界に帰らせて下さるのだ。神仏におまかせ致します。どちらになつても、不動尊の眷属けんぞくとならせて頂き、仏道を守り、世のため、人のために命を捧げて働かせて頂きますと不退転の菩提心を起しました。

## 靈

## 夢

心の持ち方が變つてからは、肩の荷が下りたような、軽い身を感じるようになり、寒中の滝行も、地獄の苦しみではなく、出た後はさわやかになりました。一月二十三日師の奥さんが、朝食の時、ニコニコして「聖規さんの病氣は必ずよくなりますよ。昨夜お不動様

があなたを抱いて、滝川の中で不動剣で腹を切開し腸の中まで洗い清めて下さる有難い夢を見ました。手術中でもあなたはとても元気でニコニコ笑っていましたよ」と話して下さいました。私はそうでしたか、きっと助けて頂きますと素直にお礼を言えるようになります。

## 業障消滅

聖規は死んだと言う声がします。私は行者として座禅したまま死んでいます。死ぬことは、恐ろしいこと、苦しいことと、思いつめていた私は、死とは何んと安らかなものか、有難いことだと感謝し乍ら身を正して座禅をしています。火葬をしてやろうと、周囲に薪木を積み、火を付ける童子がありました。火は燃えさかり、私の身体は火焔に包まれて焼けて行きます。然し少しの熱さも、苦しみも無く焼ける自分を見て、有難うございま

すの連続であります。そのうちにすっかり焼け尽きて白骨のままに座禅が続いています。私は死んでも、焼いても、白骨になつても、自分がある、苦しみのない座禅の世界、即仏の世界があることを知りました。歓喜の座禅中に私の處へ黒い巨大な方が入つて来ました。半眼の座禅ですから上の方は見えませんが黒く太い足が見えました。その足で白骨の私を蹴りました。私の白骨は割れて転び、中から男の子が飛び出しました。ハツと思つて目を開けたらそれは夢でした。一月二十八日夜明の五時であります。夢さめた私は飛び起きて、これはお不動様だ、私の病氣と悪業も總て焼き尽くして下さったのだと直感して不動尊を伏し拝みました。

その日から毎日の発熱が止まり、長い間の下痢が止まり喉の咳啖のどが一ぺんに治つてしまつたのです。私は健康体に生まれ替わらせて頂いたのです。勿体ない、有難い、嬉しい、不可思議な靈験に心より感謝し、菩提の行願の退転せざる事を重ねて誓つたのであります。

南無大日大聖不動尊

合掌